

その十六 訪れ

雨が上がった。傘を閉じて神戸を見下ろす坂道を登って大学に向かう。六甲風ろっこうおろし——神戸の街は六甲山地の吹き降ろしの中にあるから透明感がある。今は夏。六甲風が心地よい。見上げれば粘る梅雨空を吹き飛ばして、まるで夜明けのように見える。

モリ・P R・コーポレーションとの関わりを完全に断ち切るために豊中市役所を退職した。広報課に配属されたのが過ちだった。今は時間に縛られないアルバイトで凌いでいるから遅刻せずに通学できる。昼間課程ならとつくに夏休みだけど、夜間課程は時間割が窮屈なので夏休みが短い。

ふと知秋チアキを思い出す。もし結婚していたら一緒に通っていたかも知れない。もちろん夜間課程だが。でも、彼女はすべてを断ち切るために退学した。その気持ちは今よく分かった。

さて、今の俺には講義を聴くのが一番の慰み。アルバイトを終えて狭い部屋でアルコール漬けになるより、一番前の席で講義を聴きながら眠りこける方がいい。ちなみに夜間課程では居眠りしても教授からとがめられる事はない。ただし、イビキはだめだ。

本学舎裏の学生食堂に直行する。財布から小銭が寂しい音をたてて掌に顔を出す。素うどんかきつねうどんか迷うけど、券売機の「キ」のボタンを押す。食券を盆に乗せて配膳口に立つ。

「キ」とはきつねうどんのこと。俺は一生、きつねうどんを食べる度、人生の悲哀を感じ続けるだろう。夏だからざるそばか冷麺を食べたいがアルバイトの身、贅沢はできない。きつねうどんが限界だ。

この時期、しかも夕方、食堂の利用者は夜間学生だけなのでガラガラ。食器返却義務があるから配膳口に近いテーブルに座る。冬なら七味をたっぷりと掛けるが、夏だからお冷やを掛けてヌルくしてからズルズルと食べ始める。うどんを腹に収めると残った汁をすすする。

突然目の前に女子が座る。大きな眼鏡越しにニタリと笑う。見覚えがない。ダラダラと流れる汗を手の甲で拭うと汁を飲み込むのも忘れて見つめる。

「とぼけて、ア・タ・シ」

——美英子！

驚きのあまり一気に汁が流れ込んで咳き込む。そして噴水のようにプワーと汁が飛び散る。

「キヤア！」

美英子が飛び退く。閑散としているとはいえ注目を集める。

「ゴッ、ゴホ、ゴホッ……」

立て続けの咳で息ができない。

「大丈夫？ どうしよ。ごめん。これ……」

涙でよく見えないが目の前のピンクのハンカチをもぎ取るとトイレに駆け込む。

洗い場の手をついてハ―ハ―と息を継ぐ。吐こうとしても吐けない。そのときトントンと背中を叩かれる。同時に蛇口から水が出てくる。両手で水を溜めて口をゆすぐ。そしてピンクのハンカチで汗と涙と口元と手を拭く。鏡を見ると男子トイレなのに女の顔が映っている。

――髪を切った？ オマケにオバケ眼鏡！ 怪獣ミエゴン？
トイレを出る。咳は止まらない。涙も止まらない。声も出ない。三重苦のなか食堂に戻る。

*

学舎の廊下を歩きながら必死に考える。でも美英子は横で平然としている。

「講義、一緒に受けてもいい？」

「なに、しに、きてん」

かすれた声だったが、何とかセリフにした。ピンクのハンカチで鼻をかむ。

「お札に」

「お札？ 何のや？」

今度はきちんと発音できた。

「何のやて……言われても……」

階段を上り始める俺の頭の中で「なぜ」が何発も爆発する。

「怒ってはる」

そう！ 俺は怒ってるのだ。返事なんかするかと講義室のドアのノブを捻る。

「アタシ……ここで待ってる」

急に美英子の声から勢いが消える。気にせず足を踏み入れたが薄暗い。

——二階と三階を間違えた！

後ずさりする。横から覗いていた美英子が叫ぶ。

「休講や！」

「講義室、間違えただけや」

再び階段を上り始めると腕を取って誘惑してくる。

「ねえー、さぼろー。サボろーよ」

階段を数段上ったところで強く引つ張られる。力負けするわけないが一段下りると美英子は二段下りた。すると不思議にも俺が先に階段を降り始める。

「ウチ……じゃない、アタシのこと、褒めて」

「ほめる？」

「ウン」

ついに一階まで下りた。

「……アタシ、方向音痴やんか。けど、ここまで来たんよ。車で。免許とつたん！ 昨日^{キノ}」

「えー！」

免許取り立てで大阪からここまで来たことに驚く。でも「褒めて」とはどういうこと？

手を離すと美英子は短くなった髪の毛をすきながら食堂横の駐車場に向かつて歩き出す。逆光で髪の毛は輝き、それを意識したような優雅な足取りで白い車に近づく。

「兄貴の車。買ったんは兄嫁やけど」

キーを差し込み乗り込む。ドアを開けたままジーンズの裾を折りサンダルを脱ぎ座席下に入る。そして追いついた俺の顔を見て「クスッ」と笑う。

「今日は、美英子教授の講義を受けなさい」

返事の代わりにドア越しにピンクのハンカチを返そうとする。

「そんなハンカチ、いらん。あげる」

ばつが悪い。ベチョベチョのハンカチを丸めて尻のポケットに押し込む。

「何の講義や」

美英子は尻を下げて再び「クスッ」と笑う。

「決まってるやん。恋愛論や」

「恋愛論？」

ここは凌ぐ。

「お茶でも飲もか」

「大学に喫茶店あるん？」

返事せずに食堂横の購買部へ向かう。喉を潤したいのと気を落ち着かせる時間を稼ぐために。

かなり薄くなった財布をまさぐって瓶詰めのコヒー牛乳を二つ買う。車に戻って助手席に乗り込み手渡すと後部座席に鞆を置く。

「なんや。コヒー牛乳やんか」

キョトンとしながら美英子は蓋をていねいに摘まみ上げてその一つをくれる。一緒にゴクゴクと飲む。

「冷たくて美味しい！」

吐いた後か、確かにうまい。この隙を狙われた。

「ここ個室喫茶や。何でも話せるね」

*

「夕焼けになりそうや」

息苦しい個室喫茶から開放的な海辺に逃げることにした。大学の敷地を出るまでは一本道だから道案内の必要はないが、急な下り坂で曲がりくねっている。夕方だから終点の六甲団地行の市バスがひっきりなしに走る。途中、農学部前、工学部前、本学前などの停留所が数カ所ある。道幅は広くないから美英子はバスとすれ違う度に車を止める。じつと前を見てたどたどしいハンドル操作を繰り返す。

「何の札か知らんけど、その前に、何か忘れてへんか？」

と言ってから、しゃべりかけないのが無難と、口にチャックする。

——ほんまに運転してきたんやろか。兄貴か、兄嫁か知らんけど、よう車を貸したもんやようやく大学の敷地を出た。

「これ、左？」

「ウン……」

美英子はハンドルを切ってから、シフト・ダウンせずにアクセルを踏む。

「アタシ、何か……」

エンジンがゴロゴロ鳴ってノッキングを起こして車体がガクガクする。

「あっ！」

慌ててクラッチを踏んでシフトを下げる。車は加速して交差点に突っ込む。

「ブレーキ！ ブレーキ！」

裸足で踏ん張っている。

「ギャンギャン、言わんといて！」

車は次の赤信号——橋詰めの交差点手前で停止する。

「フー。えーと……忘れる？ ウチ……じゃない、アタシ、何を……」

「いや、もうよろしいですわ」

「あ、そう……」と言いながら急に声量を上げる。

「キレイ！ 見て」

切れ切れになった灰色雲の間からのぞく陽光上方にオレンジ色の布団のような雲が被さっている。夕焼けの前ぶれだ。後ろからクラクションが鳴る。信号はオレンジではなく青。美英子は右折のウインカーを出して交差点の真ん中に出る。対向車が切れるのを待ちながら恐らくズーッと我慢していた質問をする。

「守君ミキの会社、なんで辞めたん？」

「黙って運転しろ！ 曲がれ！ 曲がれ！」

信号が黄色になってやっと右折した。

「喧嘩したん？」

瞬間的に動揺と疑問が俺を包む。前方と美英子の横顔を見ながら尋ねる。車は川の左岸を海に向かう。

「守ミキから聞いたんか？」

「聞いてへん。でも、ウチ……じゃない、アタシ、知ってんの」

「知ってる？」

「知ってんの」

——なにを？ 夏子の事？ まさか……でもあり得るか
少し動揺するが次の口撃を避けるために話題を変える。

「なんで髪の毛、切ったんや」

「ひねくれてやろうと……」

いつもの事だが独特の言い回しに翻弄ホンロウされる。

「ウソ。長いと、パーマ代、高いん」

「高い？ 金に糸目つけへんのと違うんか」

長い黒髪が似合うのに、もったいない。

「これには、長い、深い、深い訳があるん」

*

神戸の川は短く天井が多い。普段は水量も少なく澄んでいる。海が汚れている事も知らずに清らかなまま急いで流れる。短いけれど精一杯走れば、たどり着いた先が暗泥の世界であっても結果はどうでもいい。さて俺の過去は清らかだったのか？

夏子と出会って感動が連続する最高の人生が始まった。しかし、それはつかの間でわずか半年そこそこで破局が訪れ、すべてが醜くなって消滅した。恨みが残らない美しい別れなどあり得ないとすぐ気付いた。

一瞬の恋より長い友情の方に存在感があった。夏子と別れたことより、守モリが友情を破棄したことの方が辛い。なぜなら失恋で落ち込んでも守モリと仕事をしていると何もかも忘れることができたからだ。ところがその守モリと夏子は直結した。

俺は友情を金銭に両替したあの分厚い封筒をそのまま返した。始めから守モリが心底シンソコ打ち明けて

くれたのなら元々不要な金だ。しかも美英子との関係がうまくいく、いかに関わらない金だ。そんな金がなくても何とか生きていく自信はある。

今、美英子を目の前にして改めて思いをはせる。失恋からの逃避の対象としていたのでもなく、愛しているのでもないけれど、嫌いじゃない。

——何をかっこつけているんだ。好きに決まっている。だから踏ん張っている
改めて美英子の横顔を確認する。

——待てよ。神戸まで命がけで来た。踏ん張っているのは美英子じゃないか
「まだ、怒ってるん？」

言葉が途切れる。いつの間にか外は真っ赤に染まっている。

——そうか。夕焼けの助け船に乗ってみるか

「キレイやな」

車は堤の先端まで来ていた。これでもかというほど周りすべてが赤い。

「こんな夕焼け、見た事あれへん。今日はいい事、ありそう」

視線が合うと美英子の眼が潤んでいた。

「でも……ウチ……違う……アタシの事、腹立つんでしょ？」

俺は取り繕う事もなく頷いてしまう。しかし、美英子はたじろぐ事なく続ける。
「だったら叩かれてもかまへん。悪いのはアタシやから……」

運転用のオバケ眼鏡を取って俺を真正面から直視する。叩くなんて思ってもなかったから、手より先に口が出た。

「何のために来たんや？ どつかれに来たんやないやろ？」

——確かに美英子の方からやって来た！

「うん。お礼に……」

「もう何度も聞いた」

「心から御礼を言いたいん。でも聞いてくれへん……」

「どう言う意味や」

「何で分かってくれへんの」

首を少し傾けた所為か一滴だけ涙がこぼれる。そしてはじける。

「黒馬クロウマで……助けてくれた事、何も言うてくれへんかったし、会社辞めて、まるでウチ……いえ、アタシ……もういい……やつぱり、ウチはウチや。ウチで通す……えーっと何……ウチ、何を言おうとしてたんやろ……」

小さなしやつくりを二度繰り返してから言い直す。

「そうそう。ウチから逃げるみたい……」

「こんな札の言われ方されるんやったら逃げたくもなるやろ」

「違う！ 違うやんか。どうして、なんで、言ってくれへんかったん？」

「何を？」

「もう！ 助けてくれた事やんか！」

「助けたんは守キリや」

「守君と一緒に落ちてへん。ウチはマモルと一緒に落ちたん！」

「心臓マツサージしたんは守キリや。俺は横でボーツと見てただけや」

「何でそんな言い方するん！」

美英子が涙を蒸発させる。

「守キリに気があるんやから、それでええやんか」

「えー！ どういう事！」

言葉に勢いがあつたが、うつむきながら出した声は小さかった。逆に俺は大きな声を出す。

視線を戻されてもためらわない。

「守キリの誘いやつたら、いつでも尾っぽを振って……」

「違う！ マモルに会えると思つて上町さんに付いて行つただけ……」

声は小さいまま。半分聞き取れなかったが、ここが勝負と突つ込む。

「見えすぎた芝居に騙されへん！ 松本まで送つた時、守キリが結婚するつて言うたら、黙り込んでやないか」

美英子はこれ以上見開いたら目玉が落ちてしまうぐらい目を膨張させる。

「結婚！ ！ ！ ！ ！ ！」

美英子はブチツブツと音を立てるように言葉を切る。でも、すぐ目を閉じて沈黙する。「！」のカウントダウンが済んだのか目を開けて斜下オナメックから俺を見つめる。今度はかすれた声を出す。

「芝居なんかしてへん。ショックやったん……マモル……マモルやん」
「うっ！」

素足が俺を捕らえて放さない。美英子は言葉を探しているのか、間を置く。そして聞き取れないほどの声を上げる。

「夏子さん……守君モリに取られたんでしょ」

たまらずドアを開けて降りる。思いつきり強くドアを閉めると、決定的な決裂を決意して、足早に遠ざかる。

もう一つ閉まるドアの音がすると「待ってえ」と言う声がする。音も立てずに追いかけてきて俺の腕を取ろうとしたとき反射的に頬を引つ叩く。

「それを言いたくて来たんか！」

美英子が向う向きに倒れる。

——六甲駅に呼び出しておきながら来なかった。それがどうだ！ 鋭いナイフを隠し持って切りつけてきた。今日は一体なんという日だ！

夏なのに、六甲嵐の風は白い。霧のように。そして脇腹の古傷が痛む。

*

車に戻って鞆を取り出す。美英子はほんの十メートルほど後ろにいる。背中をこちらに向けて倒れていた。軽く叩いたが殴ったわけではない。でも動かない。

振り返って美英子の全身を見つめる。素足。細い足首。裾を折ったジーンズ。くびれたウエストと丸いヒップ。背中を向けているから本人が断言した成長が止まった胸は見えないけど……少し張った肩……スレンダーだがすべて女そのもの。

忍び足で戻る。数歩近づくと心持ち足早になる。最後の一步は地面を叩く。期待した——勝手に想像した。ニコッと立ち上がる美英子を。しかし、まったく動かない。当てが外れて立ちん坊になる。そして声が勝手に離れていく。

「帰り、事故でも起こしたらあかんと思うて……」

たどたどしい運転を考えると当然だが、気持ちがかもってなかった。すぐ後悔して屈むけど手を伸ばせない。するとか、細い声がする。

「……このままにして……泣き顔見られたくない」

恐る恐る肘の少し下を掴む。すると顔の下から片方の手が出てくる。セリフの割には簡単に顔を上げる。潤んだ目、長いマツゲに夕焼け色の涙がぶら下がっている。

「帰るか……送る」

俺の手を掴んで起き上がるとペタンと座る。

「もう少し、ここにいたい」

美英子は遠くを見つめる。大きな夕陽が海に落ちかける。

「叩いて、ごめんな」

「ううん」と、くぐもった声を出す。

「悪いのはウチ」

今度は手を握りしめて立ち上がる。繋いだままゆつくりと歩き始める。どちらともなく波打ち際の赤い赤い階段を下りる。海面から少し上のところで並んで座る。

緊張した空気を和らげるためか美英子は微笑みながら先に口を開いた。そして唇に人差し指を当てる。

「ウチ、なんで『アタシ』と言わんと『ウチ』って言うんか、わかる？」
慣れているとは言え予期せぬ言葉に戸惑う。

「『ウチ』やったらあまり口を開けずに声、出せるん。でも、『アタシ』やったら口を広げんと……わかる？ 唇、切れるん。一度言ってみて」

「『ウチ』、『アタシ』……確かに」

「ウチの唇、カサカサ病やから母音の『ア』が苦手。リップクリーム、塗るけど口紅塗れない。だからメイクせーへん。ドーせ、ブスやからどうでもエエけど」

「そんなことない。キレイや……」

——髪の毛、長い方がキレイやった。勿体ない……でも短くても……

「……いや、可愛い」

「なんで言い直すん。ブスでも見慣れたら我慢できるって言ってくれたらエエやんか」

すぐ反応できない。美英子はじっと俺を見つめる。俺は心の中で二回練習してから精一杯の声を上げる。

「じゃあ……見慣れた。可愛いブスや。こんな可愛いブス、生まれて始めて見た！」

美英子の瞳に涙があふれ出す。

「泣くなよ……ブスは俺や」